46　いわゆる『儒醫』についての考察――III 土葬（埋葬）

田中　祐尾
大阪市立大学医学部

17 世紀以降 , 我が国の封建社会身分制度における医師などの教養は多くが儒教儒学に拠るもので，儒式による葬儀即ち屍体は土葬が慣例であったことは前述した．筆者の先祖は六代遡って土葬による儒墓を構築しこれを存続させている．河内の国大窪村来迎寺の一角百坪の墓地である．18 世紀末頃大坂懐徳堂の著名な儒者たちによる仏教から儒教への転換期のものが始まりで，近隣の服部川村神光寺には懐徳堂初代学主三宅石庵と四代学主三宅春楼親子二代の儒墓がある．同寺と同村光明寺にも多くの儒者の儒墓が残っているが何れもが精々二代で途絶えていて元もと質素な外観が朽ちかけている．どの儒墓も多くは禅宗または浄土宗の仏寺の片隅に辛うじて存続するといった風情である．つまり儒教への改宗は代々の継続が困難であったか，仏教への回帰を意味している．そして儒葬は必ずしも格式通りにはいかず，江戸期も半ばを過ぎると疱瘡や虎狼痢（コレラ）といった流行り病に見舞われた集落では，屍体からの感染を経験的に察知していたため，また集団死に直面して一々埋葬している時間も空間もないまま火葬の道を取らざるを得なかった．反面，人一人を焼くには薪五束が必要で，これを成木に換算すると一人二本の木が伐られたわけで，集団死では山が一つ禿山になってしまうため，仕方なく纏めて穴を掘り集団埋葬するのが精いっぱいの時があった．これを土葬として数えるべきかが問題である．このことは中国大陸においても同じような記録がある．一方西洋史をひも解いても，より一層スケールが大きくて 14 世紀半ばのペストの流行や 1453 年まで続いたヨーロッパ 100 年戦争といった戦乱では，千人単位の死体を町ごと焼き尽くした記録が稀ではない．これをまた火葬として数えるべきかが問題である．ところがそれ以降のヨーロッパ各王国時代からルネサンス期を経たいわゆる絶対王政期にはキリスト教会の勢力が拡大して反動的に死体の埋葬が盛んとなり，火葬は忌み嫌われた時代が続くのである．以上の時代を経た埋葬と火葬の歴史を追うとき極東の一島国の儒葬の儀式が如何に小規模なものだったかが解る．現在 14 世紀末以降各時代の支配階級の儒式土葬墳墓が最も完璧に多く残っているのは韓国である．いま同国における土葬の儀式がどの程度生きているかは不知だが日本でいうお盆，韓国では「中秋」（チュソ）と呼ぶ儒教の先祖崇拝日には各地方への儒墓へ家族全員が墓参するため人口一千万人の首都ソウルが殆ど空になってしまうのである．韓国の国旗も儒教の経典「易経」由来のデザインである．即ち儒教のシンボルを今尚唯一世界に示している国なのである．我が国における神道の墓陵と儒墳との比較については，長くなるのでここでは触れない．

以上各地での埋葬と火葬の比率とその中身を吟味することにさほどの意味が見受けられないと思うが，ここで最近の TIME 誌に載った―「CREMATION」（火葬）と「BURIAL」（埋葬）のアメリカにおける現況―と題する記事のあらましに目を向ける．建国以来敬虔なプロテスタントの多い米国は殆どが埋葬による葬儀であったが西暦も 2000 年を過ぎると俄かに火葬が増え始める．理由の第一は多民族化による宗教（キリスト教）離れ．第二が低所得層の増加による圧倒的に安価な火葬の選択であった．2011 年の埋葬と火葬の全国比率は火葬が 42% で推計では 2017 年には 50% を超えそうである．勿論各州によって大きな差がある．現在最も火葬が多いのがネバダ州の 74%．次いでコロラド州デンバーの 62%．アリゾナ州フェニックスの 53%．フロリダ州マイアミの 45%．ミシガン州デトロイトの 42%．最も埋葬の多いのがミシシッピ州の火葬 16% となっている．また最近での葬儀における全国平均費用は埋葬が $7,755．火葬が $2,570 で約三分の一以下である．

他にも埋葬，火葬とも長所短所があるが，ここ数年顕著なことは，火葬の手順がボンボンと燃え上がる手法でなく，予め遺体を水と化学薬品で処理した後ステンレス製の高圧釜でごく少量の灰にして骨壺に納め，自由な副葬品を添えることがトレンドだという．以上各論点の映像を追う．